

「永遠の腕が下に」

(申命記33:27-29)

挽地茂男

2020.3.8 日本基督教団千歳丘教会礼拝

今週の水曜日3月11日で東日本大震災から9年になります。2011年3月11日午後2時46分でした。我が家では、本棚が倒れて本が散乱し、一階の台所で、食器棚から食器が次々に床に落ちて割れる音がかかなり長い間続きました。揺れがおさまるのを待ってテレビをつけました。時間の経過と共に被害の大きさが明らかになっていきます。



「東日本大震災」はマグニチュード(M)9.0の規模で、日本の観測史上最大、1900年以降に世界で起きた地震では、60年のチリ地震 [M9.5]、64年のアラスカ地震 [M9.2]、2004年のスマトラ沖地震 [M9.1] に次ぎ、1952年のカムチャツカ地震 [M9.0]と並ぶ第4位の規模でした。かつて我が国の首都圏に壊滅的な被害をもたらした1923年の「関東大震災」はマグニチュード(M)7.9で、Mが0.2大きくなると地震のエネルギーは2倍になるということです。

ら、関東大震災の45倍、1995年の阪神淡路大震災の約1450倍のエネルギーが、何かを創り出す創造的なエネルギーとしてではなく、破壊エネルギーとして大災害をもたらしたのです。

この大地震にともなう津波によって、多くの人命が奪われ、東北地方を中心とする広範囲の地域で、家屋や施設やインフラおよびライフラインが大規模に損壊し、地元の産業、農業や漁業、そして人々の生活に未曾有の甚大な被害がもたらされました。2011年4月15日現在の死者・行方不明者あわせて2万8232名。〔死亡15,894 行方不明者2,561、負傷者6,152、合計24,607名〕

さらにこの「東日本大震災」では地震・津波による被害に加えて、震災で破壊された福島第一原子力発電所から漏出する放射性物質のもたらす被害と恐怖は深刻なものになりました。被災からの「復興」に向かう意欲や努力をも無にしてしまうような巨大な脅威と化しました。今も発電所では命の危険性のある作業が続けられています。



かつての関東大震災〔1923(大正12)年9月1日(土)午前11時58分(44秒)、東京の南方100キロ、相模湾海底を震源地として発生〕の被害は、家屋全壊21万8000戸、半壊21万6000戸、焼失44万7000戸、死者14万3000人、負傷者10万3000人で、原発事故を除けば「東日本大震災」をはるかにしのぐ甚大なものでした。この出来事を、当時の日本のキリスト教界の指導者はこのように受け止めています。



無教会の指導者であった内村鑑三は、震災直後に「天災と天罰及び天恵」という一文を記しています〔『主婦之友』第7巻10号(大正12年10月1日)〕。「天災は読んで字の通り天災であります。即ち天然の出来事であります。…地震に正義も道徳もありません。…地震は起こるべき時に起こったに相違ありません。併しながら無道徳の天然の出来事は之に遭う人によって、恩恵にもなりまた刑罰にもなるのであります。そして地震以前の東京市民は著しく墮落して居りましたゆえに、今回の出来事が適当なる天罰

として、彼らによって感ぜらるるのであります。…震災以前の日本国、殊に東京は義を慕う者の居るに堪えない所でありました。…大地震によりて日本の天地は一掃されました。…新日本の建設は茲に始まらんとしています。私は帝都の荒廃を目撃しながら涙の内に日本国万歳を唱えます」と震災をもって天罰とを感じる心から刷新が始まるとする、内村の有名な「天譴論」です〔天譴=天の咎め。その他の天譴論:渋谷栄一、北原白秋、坪内逍遙、摂政裕仁、石原慎太郎等〕。

今一人、当時の日本基督教会(旧日基)の指導者であった植村正久は先の内村の文章より1週間後にこう書いています〔『婦人之友』大正12年10月7日第17巻10号〕。「禍害に遭うものあれば、

これを天罰であると考え、ある罪惡の結果であろうと推測するのが尋常事である。……しかし世



の中の事は甚だ複雑で、よほど込み入っている。凡ての災害を罪惡に帰するは間違いである。…しかし其処に一つ最も明白なことがある。禍害は神の業が現れる機会を与え

る。それが禍害の世に在する一つの理由であろうと思われる。…九月一日の災害は徒らに思弁に耽り、その原因を討論するに用ゆべき機会ではない。之を端緒とし、之を動機として、神と歩調を整え、その愛の業に参加し、退いて精神を鍛練し、敬虔に気風を養い、信仰の生活を修成すべき機会である」。

ここには内村のように不義を糾弾し、震災を悔い改めの機会とせよ、と宣言する預言者的な側面はありませんが、いかにもよい意味で、牧師・牧会者的です。植村が支えていた日本基督教会は、この震災で中心的な教会を失います。新栄、芝、麴町、浅草、両国、日本橋、本所、富士見町、明星(現・小石川明星)、神田。横浜では海岸、指路、太田、それに鎌倉などの明治前期の日本のキリスト教の歴史的舞台となった諸教会です。植村にとって、これらの教会の再建が大きな課題でした。天罰を論じている気分でも、そんな余裕もなかったと思われます。むしろこの悲惨は、「神の業の現れんために生かすべきだ」と信じ直して、復興・前進へと向かったのです。

20世紀を代表する神学者のポール・ティリッヒという人が、第二次世

界大戦の戦禍の後に「地の基が震い動く」(Paul Tillich, “The Shaking of the Foundations.”)という重要な説教を残しております。第二次大戦では戦火によって全世界で約6200万人の人名が奪われます。最後には人類にとって未知の化学兵器・原



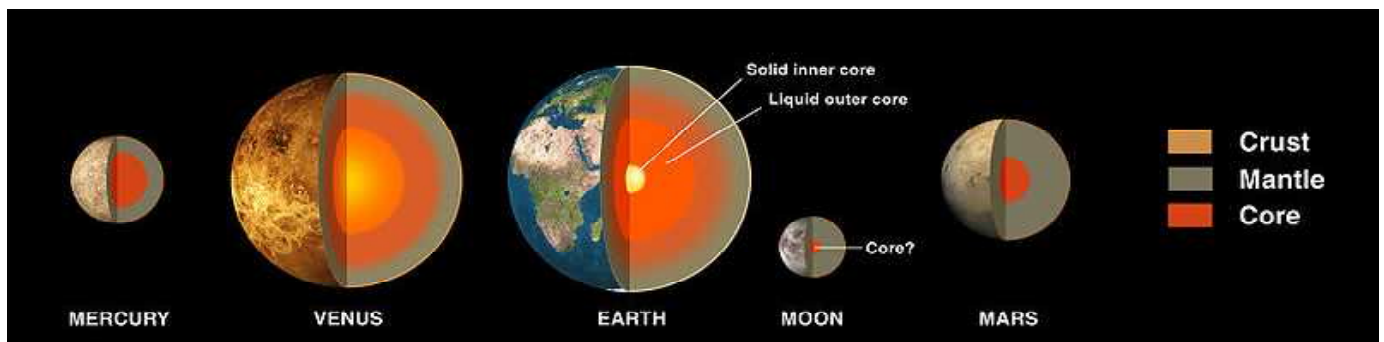
子爆弾が投下されます。この戦争のもたらした惨状をティリッヒは預言者イザヤの言葉をもって描きます。イザヤ24章19－20節。「24:19 地は裂け、甚だしく裂け／地は碎け、甚だしく碎け／地は揺れ、甚だしく揺れる。24:20 地は、酔いどれのようによろめき／見張り小屋のようにゆらゆらと動かされる。地の罪は、地の上に重く／倒れて、二度と起き上がることはない。」この説教の内容を、一言で要約するとこういうことです。「地の基が震い動く」時、それはわたしたちが「地の基を定めた方」の存在を知る時、その存在に目覚める時だということです。

神はこの世界を創造し、そこに秩序を与えられました。秩序とは、本来、破壊的な力を内側に包みこんでいて、その力に制限を加えること

によって成り立っています。「地の基を定めた」神は、この地球を「地殻（地表面）とマントルと地球の核」からなる構造の中にその基を定められました。地殻は大きなものだけで十数枚のプレート(岩の板)によって形成されています。しかし、科学者によれば、地表を覆っている「地殻」は地球全体からすれば、牛乳を温めたときに表面にできる薄い皮、皮膜のようなものにすぎないと言います。そしてその地殻の下には、「マグマ」と呼ばれる——火山爆発で溶岩として噴火してくる——液状化したマントルに象徴される巨大なエネルギーが、つまり破壊的なエネルギー力が一定の制限を加えられて秩序を形成・維持しているのです。科学文明は、このような自然界に与えられている秩序の鍵を手に入れ、破壊的なエネルギーの秘密を開き、それを利用することを第一義的な目標として発展してまいりました。人間の作り出す秩序は、時には無限の安定を約束するかのよう

な幻想を与えることがあります。しかし地の基は震え動くのです。人間は自分自身で地の基を定めた主であると錯覚することも、また定める能力を持つと錯覚することも許されてはいません。地の基が震え動くとき、わたしたちは人間が作り出し、獲得した秩序が、いかに脆弱なものであるかを知るのです。それは科学のもたらす科学・技術的な秩序であれ、社会的・政治的なものであれ、いつでも崩れ去る危険を内に秘めているのです。

預言者たちはこの世の秩序の破滅、崩壊、天変地異を語りました。イザヤもそう、エレミヤもそうです。ご存知のように、聖書は常に、この世の始まりと同時に、この世の終わりについて語ってきたのです。聖書はこの世の「始まり」を知れと言うのと同時に、この世の「終わり」を知れと言うのです。また、あなたの命の「始まり」を知れと言うと同時に、あなたの命の「終わり」を知れと言うのです。わたしたちは「すでに」創られ



て、「いまだ」終わりの完成を待ち望む世界に生きています。わたしたちは、創造の始まりから自分のかけがいのない「今」を生きると同時に、この世の終わりから一回しかない「今」を生きなければなりません。



預言者たちはこの世の悲慘を見つめました。また世界の終わりを見据えました。しかし見たのは悲慘と終りだけではなかったのです。神の救いと恵みを見たのです。イザヤ書51章6節で神は、預言者イザヤに、視線をいったん

天に向け、そして、地を見渡すように命じます。そしてそこに世界の破滅と悲慘を見出そうとも、尚も、神の救いと恵みの業が永遠であることを宣言します。「51:6 天に向かって目を上げ／下に広がる地を見渡せ。天が煙のように消え、地が衣のように朽ち／地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても／わたしの救いはとこしえに続き／わたしの恵みの業が絶えることはない。」

出エジプトによって、イスラエルの民を導き出したモーセは、約束の地と自分の死を目前にして、

イスラエルの民にこう告げます。「とこしえにいます神はあなたのすみかであり、下には永遠の腕がある」(申33:27 口語訳)。「永遠の腕が下に」。あなたを支える「永遠の腕が下に」ある。40年間の荒野の試練に裏打ちされたモーセの言葉です。

原発から西に約50キロの距離に福島三春町があります。震災の年、三春町のあの有名な滝桜の蕾が少し開いた時、新聞がそれを伝えました。人々は少し開いたばかりの桜の蕾を通して、生命の喜びを再確認しました。そして少しずつ震災の被害と傷から立ち直りを始めたのです。



三春滝桜(福島県三春町)

キリスト教は(イエスの)墓で生まれる新しい生命について語る宗教です。受難とはその生命に至る苦しみの道です。復活は——この道の終点——終わり([キリストの身体の]破壊)から生まれる新しい生命のことです。イースターに向かうこの時期、主イエスの受難を覚えつつ、新しい1週間も祈り深く歩んでまいりましょう。祈ります。

2020.3.8 日本基督教団千歳丘教会礼拝